

「おれの方ほうが強つよい。」「いいや、ぼくの方ほうが強つよい。」北風きたかぜと太陽たいようの声こえが聞きこえます。二人ふたりはどちらの力ちからが強つよいかでケンカをしているようです。「太陽たいようが毎日まいにち元げん気きだから、暑あつくてみんな困こまっているよ。おれが涼すずしい風かぜを吹ふくと、みんな嬉うれしそうだ。おれの方ほうがみんなの役やくに立たっているよ。」「でも、ぼくがないと、木きや野や菜さいは育そだたないよ。冬ふゆは北風きたかぜの吹ふく風かぜが冷つめたくて、とても寒さむかった。みんな外そとに出でられなかったよね？最近さいきんは暖あたたかいから、みんな喜よろこんでいるよ。」「いいや、あそこを見みて。太陽たいようが強つよく照てらすから、川かわの水みずがもうすぐ無なくなりそうだ。水みずがないと、みんな生活せいかつできないよ。」

二人ふたりとも自じ分ぶんの話はなしばかりして、人ひとの話はなしを聞ききません。二人ふたりは毎日まいにちケンカをしていました。ある日ひ、北風きたかぜはいつものように言いました。「ケンカは終おわりにしよう。おれの方ほうが強つよいんだから。」太陽たいようもいつものように言います。「うん、ケンカは終おわりにしよう。けど、僕ぼくの方ほうが強つよいと思おもうよ。」その日ひもケンカは終おわりそうにありません。そのとき、北風きたかぜはマントを着きた若わかい男おとこが歩あるいているのを見みつけました。北風きたかぜは言いました。「あの人ひとのマントをどちらが早はやく脱ぬがせることができると思おもう？これでどちらが強つよいかを決きめよう。強つよければ簡単かんたんにマントを脱ぬがせることができるはずだ。」「それはいい。よし、やってみよう。」二人ふたりは男おとこのマントを脱ぬがせることにしました。